

夏至の日の手足明るく目覚めけり 岡本 眸

6月21日は二十四節気の一つ「夏至」でした。北半球では太陽がもっとも高く、日の出から日没までの時間がいちばん長い日です。朝、目が覚めると、外ではすでに日が昇り、太陽の光がカーテン越しに部屋を明るく照らし出すようになりました。アパートの北に広がる妙見の森からは、鳥のさえずりが聞こえてきます。東北地方はすでに梅雨に入っており、梅雨寒の日もありますが、夏の盛りに向かって暑さが日ごとに増していきます。学校ではエアコンの稼働も始まりました。生徒諸君には体調管理に留意し、学業と部活動に励んで欲しいと思います。



通常の教育活動が再開しました

6月1日に通常の教育活動が再開されてから4週間ほどが経ちました。生徒全員が登校し、授業は通常の時間割にもとづき行われています。8日には生徒諸君が待ちに待った部活動も始まりました。久しぶりに学校に活気が戻り、学校が学校らしくなってきました。今後は基本的な感染症対策を講じながら、教育活動を展開していきます。あらためて手洗いの励行、マスクの着用、フィジカルディスタンスを心がけるよう指導するとともに、対面では昼食を摂らないことや、マスクを適宜外して熱中症予防に努めるよう注意を喚起しています。生徒諸君には一日も早く学校生活に慣れ、臨時休業で生じた学業の遅れを取り戻して欲しいと思います。また、部活動を通じて体力向上と健康増進に努めるとともに、克己心や人間関係構築力を身につけて欲しいと思います。

早大野球部の主将を務めた卒業生 ～黒木正巳の野球に賭けた青春～

福島市出身の作曲家古閑裕がモデルのNHK連続テレビ小説「エール」が放送中です。先日は早稲田大学の応援歌「紺碧の空」の誕生が描かれていました。昭和6年、東京六大学野球春季リーグ戦の早慶戦で披露されたこの歌は、早大を代表する応援歌になりました。実は当時の早大野球部で主将を務めていたのは、旧制相馬中学校を卒業した黒木正巳氏（以下、黒木と略称）であったことは、余りよく知られていません。

黒木は明治38年5月に金房村（現在の南相馬市小高区）に生まれ、大正9年4月に相馬中学校に入学、野球部の四番サードとして活躍しました。大正14年3月に卒業、同年4月に早大へ進学しました。黒木の中学時代は毎年、早大野球部の選手がコーチとして招聘されており、それがきっかけで早大を目指したと思われるが、黒木の心を捉えたのは、学生スポーツの花形である野球部よりも、自由を尊ぶ早大建学の精神でした。黒木は回顧録において、当時の心境を次のように記しています。「もとより、野球生活に未熟な、経験に乏しかった私であるから、華やかな野球選手たることを憧憬すると云ふよりも、若きワセダニアンたらんと欲して一杯であった。」

早大野球部では有力選手がひしめく中、黒木の出場回数は多くありませんでしたが、内野手の一人として堅実なプレーに徹しました。デビュー戦は大正15年春季リーグ戦の立教大学戦。この2回戦で黒木は三塁手として出場し、8回に2ランホームランを打ち勝利に貢献しました。このシーズンはリーグ3位に終わりましたが、黒木は個人打撃成績が打率2割2分2厘、個人守備成績が7割5分という結果を残しました。昭和2年4月、

一軍が米国遠征に出発すると、黒木が留守軍の主将を任せられました。留守軍は各大学との対抗戦のほか、信越・関西地方を転戦し、東北・北海道・樺太遠征にも出かけ好成績を収めています。昭和2年秋から5年は、早大にとって「受難の年」でした。リーグ優勝は昭和4年秋季のみ、人気の早慶戦では14戦で3勝11敗、昭和5年は春秋4連敗を喫しました。黒木が主将となった昭和6年は、春季リーグ戦で法政大学の渡米不在、明治大学の出場辞退もあり盛り上がり欠けましたが、注目の早慶戦は激戦となりました。早大は1回戦に敗れたものの、伊達投手の力投、三原選手のホームスチールもあり、2・3回戦に連勝し慶応に勝ち越しました。この時に選手と応援席を奮い立たせたのが「紺碧の空」です。このシーズンは慶大がリーグ優勝し早大が2位でしたが、早大は連敗の汚名を雪ぎ、戸塚球場で行われた祝勝会では黒木が選手を代表して挨拶をしています。

それではレギュラーではなかった黒木がなぜ主将を務めることができたのでしょうか。それは黒木の人間的魅力にあったようです。雑誌『野球界』の「黒木主将印象記」には次のように記されています。「言寡くして要を語り、策する所あれども之を色に表はさず、大任を受くれども敢えて動ぜず、只管練習を重ねて時の到るを待つ」。つまり、主将にふさわしい胆力を持った人物であったと記者は述べています。また当時、黒木は在学7年目の最古参で「クロさん」と呼ばれて部員から尊敬され、ファンからも慕われる存在でした。当時の大学野球では留年などをして出場を続けるケースが常態化しており、黒木も学生野球の魅力に取り付かれたのかも知れません。いずにしても

黒木は最後の1年間、大下監督のもとで主将を務め、精神的な柱としてチームをまとめる役割を果たしました。

昭和7年3月に大学を卒業した黒木は、東京ガス会社に就職します。その後については資料が乏しく詳らかではありませんが、戦後は東洋大学教務部大学院事務室長と秘書課長を歴任しました。また、昭和49年から馬城会京浜支部理事を務め、創立八十周年記念事業では寄付もしています。そして、黒木が昭和52年10月に逝去したことは、「馬城会京浜支部報」第4号が伝えています。

本校野球部は明治36年に創部され、県内でも福島師範に続き会津中、福島中、安積中とともに古い歴史を持っています。その117年の歩みにおいて、黒木の球歴は間違いなく特筆に値する偉業と言えるでしょう。



雑誌「野球界」表紙を飾る早大学の主将(2列目右端が黒木)



相馬中学第23回卒業アルバムの黒木

おすすめ書籍



平出 隆著『猫の客』（河出書房新社）

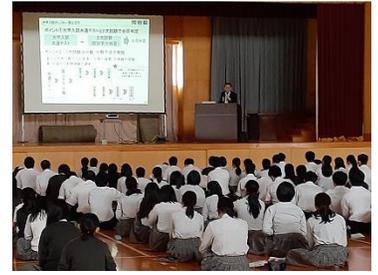
空前の(?)猫ブームです。そんなことを考えていた時、ふと思い出し書棚から取り出した本が『猫の客』です。作家とおぼしき男性とその妻は、東京郊外の街に旧家の離れを借りて住み始めます。やがて二人のもとに隣家の飼い猫「チビ」が庭をやってくるようになりました。夫婦と仔猫の出会い、交情、突然の別れが静謐な筆致で描かれています。シャコをめぐる妻とチビの諍いの場面や、チビの来訪を待つ妻のために夫が消息を尋ねる場面などは胸を打ちます。ありふれた日常が内包する物語性を実感できる一冊です。

ヘルスリテラシーについて

公衆衛生学者ナットビームによれば、ヘルスリテラシーとは「個人が良好な健康を増進し、維持するための手段として、情報を獲得し、理解し、活用するための能力や動機づけを決定する知的、社会的技法」のことです。新型コロナウイルス感染症に関する様々な情報がメディアやインターネットで拡散している今、自らの健康に関わる予防行動や他者への働きかけについて、「賢明な判断」にもとづく適正な行動が求められています。緊急事態宣言は解除されましたが、流行の第2派・第3派が懸念されています。私たちがヘルスリテラシーの重要性を認識し、さまざまな教育活動を通じて、生徒一人ひとりに健康情報を効果的に取得し活用する能力と、感染予防に主体的に取り組む態度を育成する必要があるでしょう。

3学年進路講演会が行われました

6月8日、3学年を対象に進路講演会が行われました。大学進学希望者は、河合塾の講師から最新の入試情報や受験に向けた勉強法について学びました。また、就職・専門学校希望者は、仙台大原簿記情報公務員専門学校の講師から試験対策として「志望理由と面接について」の話聞いた後、自分が志望する分野ごとに分かれ、就職や専門学校の最新情報等について学びました。生徒諸君には今後の進学先や職業選択を考える際の参考にするとともに、自分が今なすべきことに着実に取り組んで欲しいと思います。



性に関する講話が行われました

6月2日、2学年を対象に「性に関する講話」が行われました。近年、社会環境の変化に伴い、生徒の生活習慣の乱れや、心の健康、喫煙、飲酒、薬物乱用、性の逸脱行動、デートDV等、さまざまな問題が取り沙汰されています。これらの問題に適切に対応するため、専門家の講話を聴くことにより、望ましい行動選択ができる力を身につけさせることがねらいです。今回は新地町の菅野良恵先生（菅野医院副院長）をお招きし、「思春期の性に対する正しい理

解」のテーマでお話を頂戴しました。主な性感染症の原因や症状を分かりやすく説明するとともに、望ましい行動や心構え、予防策について、事例を交えながらお話をいただきました。生徒諸君には、自分の命と相手の命を大切にす視点から、望ましい行動選択ができる能力を身につけて欲しいと思います。



バッティングマシン寄贈

6月4日、野球部OB会前会長の立谷幸雄様よりバッティングマシン1台と練習用ボール10ダースが贈られました。立谷様は昭和31年3月に卒業された大先輩です。長年にわたり馬城会副会長、同相馬支部長として本校の発展にもご尽力いただきました。今回、新型コロナウイルス感染拡大による部活動の中止に心を痛められ、活動再開後、マシンを活用し効率的な練習と技術の向上を図って欲しいとのことでした。当日は相馬ホールで贈呈式が行われ、私から立谷様を紹介した後、ご本人からコロナ禍に負けることなく、野球に打ち込んで欲しいとご挨拶を頂戴しました。主将の新開威歩己君からは、御礼の言葉とマシンを活用して一所懸命練習し、地域の皆様の期待に応えたいとの決意表明がありました。



消毒用エタノール寄贈

6月4日、成田食品株式会社副社長 佐藤ヨシエ様より消毒用エタノールを頂戴しました。ご家族には相馬高校を卒業された方もおられ、気にかけていたとのこと。学校施設の消毒に使用し、新型コロナウイルス感染症対策に役立てて欲しいとのお言葉をいただきました。今後、学校でも長期的に感染症対策を講じなければならない状況であることから、感謝の気持ちで一杯です。有り難く使わせていただきます。当日は経理課長佐藤聡子様、開発・品質管理課係長補佐鈴木良樹様も同行されました。



同窓生列伝⑭折笠晴秀（1885-1965）続編 ～馬城会と母校発展に尽して その2～

前回に続き折笠と馬城会についてです。昭和14年8月の馬城会総集會において、折笠は馬城会本部の初代会長に選出されました。この総集會では規約会則の改正が審議され、それまで会長は「本校校長ヲ推シ本会ヲ総理ス」とあるように校長が務めていましたが、卒業生の中から互選することになりました。その結果、会長に折笠、副会長に佐藤董（中1回卒）、佐藤弘毅（中6回卒）が選ばれ、校長は名誉顧問に就任しました。この頃、学級増に伴う校舎改築と寄付募集、創立四十五周年に向けた馬城会基金の募集、卒業生の母校への派遣、運動部の振興のための講師招聘等が課題になっていました。そのため、副会長や幹事がたびたび上京し、様々な援助を京浜馬城会に要請しています。昭和15年、基金の目標額について、折笠の代理として渡辺扶が京浜馬城会案を示し協力を約束していることから判断すれば、折笠は馬城会本部と京浜支部のパイプ役になっていたのは間違いのないようです。また、折笠から各町村実行委員へ委嘱状が送付され、町村単位で募金を行うなど、地元の協力を取り付ける努力も行われました。今は散逸して見るできない『馬城会報』を発刊したのも折笠会長の時代でした。

昭和18年、戦局の悪化に伴い、理事会は総集會の無期延期を決定しました。昭和19年、折笠は京浜支部で募集した1万円を馬城会基金として本部に送金する意向を連絡し、基金による山林の購入と経営を勧めています。理事会は購入困難と管理不可能を理由に気持ちを損ねることなく断り、本部に送金してもらうことを懇願したと『相中相高八十年史』は

伝えていいます。

終戦直後、折笠は引き続き会長を務めました。『教務日誌』には、早くも昭和20年11月29日、折笠が来校した記述があります。折笠は戦争中に小高町女場に疎開しており、東京に戻る際に学校を訪問したのかもしれませんが。同21年7月22日、折笠はじめ馬城会役員が来校し理事会が開かれました。同年9月には戦争で久しく開催できなかった総集會が開催され、創立五十周年記念事業案、図書館・郷土博物館の建設等が決議されました。戦時下で四十五周年を祝うことができませんでしたが、昭和23年5月7日、創立五十周年記念式典が、学校、馬城会、保護者、地元町村を挙げて、華々しく挙行されています。芳名帳の来賓欄には折笠の名も見られますが、式次第によれば会長挨拶は副会長の佐藤弘毅が代行したようです。同年8月の総集會では役員改選が行われ、折笠は会長職を退き顧問に就任し、新たに会長になったのは副会長の佐藤弘毅でした。また、9月にはかつて京浜支部において折笠が中心となって募集した基金1万円が本部の経常費として入金されています。

以上のように、昭和14年から昭和23年までの9年間、折笠は馬城会の会長を務め、戦局の悪化と戦後の混乱という未曾有の困難の中、馬城会と学校の発展に尽力しました。その功績は、馬城会基金の設置、馬城会報の発刊、学級増に対する学校支援、創立五十周年記念事業など、枚挙にいとまがありませんでした。